

山形県川西町

K-854

道伝遺跡

第2次重要遺跡確認調査概報

1982

川西町教育委員会

序

本報告書は、川西町教育委員会が調査主体となり、昭和56年度に実施した川西町下小松道伝遺跡の調査結果をまとめたものである。

昭和54年度より、白川右岸地区県圃場整備事業として、緊急発掘調査が実施され、注目される出土品が多数発見された。中でも木簡5点、うち1点は寛平8年(896)という年紀がある木簡が発見されている。

更に昭和55年度より、3ヶ年計画で重要遺跡確認調査地区と認められ、今年度は、その第二次の年度として発掘調査にあたったが、東北地方としては、珍しい絵馬が2点、斎串が2点発見されている。このような貴重な出土品から、たゞ単なる集落跡ではなく、公的な官衙跡と推定される根拠が濃くなっている。然し公的施設跡であるという全体的な遺構の確認が得られないので、明年度の第三次重要遺跡確認調査に期待がかけられているところである。

本調査にあたって、地元地権者のあたゝかいご協力、ほんとうに有難うございました。又直接発掘作業に参加下さった方々はもとより、文化庁・県文化課・山形県考古学会・宮城県多賀城跡調査研究所・東北歴史資料館の方々のご指導ご協力に対し、心から感謝とお礼を申しあげます。又現地まで来られてご指導賜った、元山大教授の柏倉・工藤の両先生に対し心からお礼を申しあげます。

なお本報告書は、町嘱托員藤田宥宣氏・調査補助員渡辺源二氏のご努力によるもので、深甚なる謝意を表する次第である。

又この道伝遺跡発掘を契機として、町内に川西町文化財保護協会設立の気運が高まり、既にその設立準備会がもたれ、この報告書が完成される頃は、立派に設立されているのではないかと思われ喜びにたえません。

最後に本報告書が、埋蔵文化財に対する理解と愛情を深め、その保護普及の一助になれば幸いと存じます。

昭和57年3月

川西町教育委員会

教育長 笹木勝政

昭和 56 年度道伝遺跡
調査概報

正誤表

頁	行	誤	正
序	17	掘花	嘱託
目次	22	SB12窟立	掘立
1	才1回	第1回発見群	第1回発見群
3~6	天氣	天氣	天氣
19	17	齊串	齊串
19	21	7文字	7文字

目 次

序
目 次
調査要項

本 文

I	遺跡の概要	1.前年までの調査	2.今年の調査地選定	1	
II	調査経過	調査日誌	3	
III	発見された遺構	1.建物跡	2.溝跡	3.土壤	8
IV	出土遺物	1.土師器	2.須恵器	3.木製品	15
V	まとめ	19

挿 図

第1図	道伝遺跡周辺の地形図	1
第2図	道伝遺跡グリット配図	7
第3図	S B 12・13掘立建物跡平面図	8
第4図	遺構配図	9～10
第5図	土構平面図	12
第6図	溝跡平面図及びセクション図	13～14
第7図	S D 24・26溝跡出土土器	16
第8図	S D 22・24溝跡出土木製品	18

図 版

第1図版	1.発掘前風景	2.B地区発掘風景	3.C地区発掘風景
第2図版	1.調査地全景	2.S B 12屈立建物跡	3.S D 24溝跡全景
第3図版	1.S D 22溝跡プラン	2.S D 22溝跡遺物出土状況	3.S D 22溝跡完掘状況
第4図版	1.斎串出土状況	2.須恵器蓋出土状況	3.須恵器坏出土状況
第5図版	1.第1号絵馬	2.第2号絵馬	
第6図版	S D 24・26溝跡出土土器		

調査要項

1. 遺跡名 道伝遺跡
2. 所在地 山形県東置賜郡川西町大字下小松字道伝前(他)
3. 調査期間 昭和56年6月1日～同年6月17日
昭和56年8月20日～同年11月18日
4. 調査主体 川西町教育委員会
5. 調査協力 山形県教育庁文化課、東北歴史資料館
6. 特別調査員 柏倉亮吉・工藤定雄・加藤 稔・佐藤鎮雄・手塚 孝・平川 南橋爪 健
7. 調査協力委員 五十嵐不二雄・井上昌平・石田四郎右衛門・石田東一・小原久助
小関寿郎・竹田源右衛門
8. 調査主任 藤田宥宣
9. 調査員 渡辺源二・蔵田順治・竹田又右衛門・月山隆弘
10. 事務局 川西町教育委員会社会教育課 工藤盛光・佐藤 肇・船山エイ

例　　言

1. この概報は、川西町教育委員会が昭和56年度に行なった、重要遺跡確認調査の発掘調査概報である。
2. 插図縮尺は、それぞれにスケールを示し、遺構の覆土はFによって表わした。
3. 土色は「標準土色帖」農林省農林水産技術会議事務局監修を活用した。
4. 発掘調査概報の作成には、藤田・渡辺が担当し、不明墨書文字の解読は平川南氏に依頼した。



- 1.龍藏北遺跡 2.中小松六角遺跡 3.佐野遺跡 4.尼ヶ沢遺跡 5.千松寺経塚群 6.尼ヶ沢土壙
 7.千松寺遺跡 8.諏訪遺跡 9.平谷地遺跡 10.招城遺跡 11.開遺跡 12.片町東遺跡
 A薬師沢墳墓群 B舞台山墳暴群 C尼ヶ沢墳墓群 D正安寺墳墓群 E平谷地墳墓群

第1図 道伝遺跡周辺の地形図

I 遺跡の概要

1 前年度までの調査

当地域は土器片が昔から散乱していた所で、農作業においては、馬耕の鋤に丸太が当間^{註1}隔にあたる所であると云われてきた。昭和の初め、当地域の有識者の届けにより、調査が行なわれたものである。

・昭和10年11月15日

山形高校教授、故・安斎 徹氏が6本の柱根を確認し、その内の4本は2.6m等間隔で南北を示すことと、柱根の直径は34cm、長さ58cmの杉材であることが確認された。

・昭和53年4月30日

第1回予備調査、川西町教育委員会が主体となり、2本の柱根と須恵器片を検出する。

◦昭和53年10月27日

第2回予備調査、川西町教育委員会が県文化課の協力をえて、柱根と須恵器片を検出し、遺跡総面積が23,625m²の平安時代集落跡と判定した。

◦昭和54年5月1日～5月30日

第3回予備調査、川西町教育委員会が、ボーリング探査と試掘を平行して行ない、遺跡は120,000m²であることが確認され、遺跡を包含する160,000m²の1/500の地図を作成する。

◦昭和54年6月1日～8月28日

緊急発掘調査、昭和10年に確認された柱根は3間×7間、2面廂の掘立建物であることが判明し、掘立建物跡8棟、また大溝より、墨書き土器93点、木簡5点、きね、鍬、櫛、盆、曲げ物等が検出された。調査面積3,285m²である。

◦昭和55年6月2日～10月3日

第1年次重要遺跡確認調査、掘立建物跡2棟、大溝2条（SD1コーナー部確認）木柵類（裏に水、二万、田、平等の文字が彫られている）墨書き土器、曲げ物等が検出し、精査面積は1,140m²である。この年にベンチマーク（BM1, G 25-75 標高213.585m）を作成する。

2 今年の調査地選定

緊急発掘調査で検出されたSB1（3×7間2面廂）を中心遺構と考えられ、昭和55年度に東側を調査、今年度は西側を中心に調査地を設定し、SB1に平行する遺構検出と、SD1（大型溝）の性格を把握するための調査地選定である。

A地区G 77～87-82～96は、当地区西方80mに長さ南北約80m巾6mの土塁が現存し、この土塁が北端で直角に曲り、当地区に向い30mのところでなくなっている。この土塁外側には幅3mの周溝が確認される所もあり、この溝が当地区まで延長するものかどうかを確認する意味で設定する。

B地区G 78～92-45～79は、SB1等中心遺構から西方約30～60mの地区に当る。またSD1が、直角に曲る溝と仮定すればこの地区南側で検出できるものと当地区を設定する。

C地区G 70-16～35は、ボーリング探査で溝跡が確認され、この溝がSD1に延長する溝であるかを確かめるため設定する。

D地区G 15～40-115は、昭和55年度にSD1の延長であるSD5（コーナー部）が検出された。この確認地点より直角に進む溝であるとすれば、当地区で検出されることになる。以上のように、今回の調査は、昭和54年度に想定されたSD1の性格（遺跡を区画する方形状に廻る大溝と想定）を確認するために調査地を考えたものである。

Ⅱ 調査経過

第2年次重要遺跡確認調査は、昭和56年6月1日より同年11月18日まで調査が行なわれ現場設営、機材整理、規準杭設定等は昭和56年5月末まで、準備に入っている。調査時期は、調査地によって異なり、A地区は6月1日より6月16日、B地区は8月21日より11月18日、C、D地区は10月22日より11月18日である。これは、調査地が、公民館敷地、減反政策による水田地、普通作付け水田等の違いによるものである。今年度の精査面積は638m²であり、調査日誌をもとに経過をたどることにする。

調査日誌

6月1日(月) 晴のち小雨	遺構検出「ローリングタワー組立、平面図実測」
— A地区発掘開始 —	6月9日(火) 晴
G 87-83～96、写真撮影を行ない、表土剥離作業開始、第I攪乱層、第II黒褐色シルト層、第III黒色粘質土層となり、第III層下にて遺構が確認される。	S D 23 挖り下げ、R W 51～58、R P 55～59、自然遺物出土、S D 22・23は覆土より同じ溝と判明
6月2日(水) 晴	6月10日(木) 雲り
G 87-86～88 遺物、R P 1～15、S D 20・21 確認、G 79～87-83 表土剥離	遺構、S D 20・21、K S 42、P群掘り下げ、写真撮影
6月3日(木) 晴	6月11日(木) 晴のち雲り
G 79～87-83 面整理、R P 17～23、S D 22 確認第1～2層掘り下げ、R W 1～3	G 84～86-86・87 平面図実測
6月4日(木) 晴	6月12日(金) 雲りのち雨
G 84～86-86・87 第1～2層掘り下げ S D 22 挖り下げ R W 4～49、R P 24～49、曲げもの、第1号絵馬出土（絵馬と後日判明）写真撮影	遺物洗浄、県文化課浜田課長、佐々木係長視察
6月5日(金) 晴のち雨	6月15日(月) 雲りのち晴
S D 22 平面実測、R W 20・23 木簡様木製品出土、写真撮影	埋め戻し作業、写真撮影
6月8日(月) 晴	6月16日(火) 晴
G 78～81-86 表土剥離面整理、S D 23	遺物洗浄、ローリングタワー移動、発掘器材整理
	8月21日(金) 雲り一時雨
	— B地区発掘開始 —
	G 78～92-45～79、杭打ち、草薙り、排水溝を掘る

8月24日(月) 晴	掘り下げ R P 196～200
重機にてA地区整理、B地区表土(第1層) 剥離を行なう。G 78～91-74・75 84・85-45～79	9月4日(金) 雲りのち雨 S D 24 (G 80～82-75) F 4～6層掘 り下げ完了 R P 202～343 RW 93 斎串 出土 S D 24 (G 80～82-74) F 1層掘 り下げ、G 84・85-76・77 第III層掘り 下げ、G 88～91-74・75 面整理、川西 町文化財委員視察
8月25日(火) 晴 B地区表土第2層剥離	9月5日(水) 晴 G 88～91-74・75, E B (S B 12) 3基平面実測、写真撮影
8月26日(水) 晴 G 84・85-76～79 面整理、他Gは第2 層剥離	9月7日(月) 晴 S D 24 (G 80～82-74) F 2～6層掘 り下げ、平面実測図、写真撮影 RW 99 ～120, R P 345～358 出土
8月27日(木) 雨 G 84・85-76～79, 84・85-68～ 73 面整理、作業打ち合せ	9月8日(火) 雲りのち雨 S D 24 排水、平面図実測、写真撮影、遺物 洗浄
8月28日(金) 晴 排水作業、ローリングタワー組立	9月9日(水) 雨 川西町小中学校社会科教育会にて「道伝遺 跡の発掘調査」発表
8月30日(日) 晴 第1回町民発掘、今年までの調査報告、現 地にて発掘をしていただく参加者20名 R P 66～92	9月10日(木) 雲りのち晴 排水作業、実測
8月31日(月) 晴 G 84～87-74・75 面整理、S D 24 ・25 遺構検出 平面実測 R P 93～143 写真撮影	9月11日(金) 晴 排水作業、実測、G 90～92-71～73, 表土第I・II層剥離
9月1日(火) 晴 G 78～83-74・75 表土剥離、平面 図実測、撮影、S D 24 F 1層 (G 80～82 -75) 掘り下げ R P 144～171	9月12日(土) 小雨 遺物洗浄
9月2日(水) 雲り G 78～83-74・75 S D 24 F 2～3 層 (G 80～82-75) 掘り下げ	9月14日(月) 雲り時々小雨 G 90～92-71～73 表土第I層剥離
R P 179～195	9月16日(水) 晴 G 90～92-71～73 表土第I層剥離
9月3日(木)	
S D 24 F 3～4層 (G 80～82-75)	

9月17日(木) 晴	排水, G 84・85-76~79面整理,
G 90~92-71~73表土第I層剥離	R P 361~364出土 S D 27確認
9月18日(金) 晴	10月1日(木) 雲りのち雨
G 90~92-71~73面整理, S B 12, 3間×2間遺構検出	G 84・85-76~79遺構掘り下げ
9月19日(土) 雲りのち小雨	10月2日(金) 雲り一時雨
G 90~92-71~73精査, E B 125・ 126 P 129検出, S D 24ボーリング探査 にて南進しない。	G 84・85-76~79平面図実測
9月21日(月) 晴	10月5日(月) 雨
G 90~92-71~73精査 S B 12, E B 3cm掘り下げ, S D 24南 G 81~83-71 ~73表土剥離, 写真撮影	排水, G 81~83-73ベルト排除
9月22日(火) 晴	10月6日(火) 晴
G 84・85-65~73面整理, G 81~83 -71~73表土剥離, G 84・85-75掘 り下げ	G 81~83-73ベルト排除, G 81~83 -72・73 F 1, 2層掘下げ
9月24日(木) 晴	10月7日(水) 晴
G 90~92-71~73平面図実測, E B 118, 119, 122掘り下げ写真撮影, P 129掘り下げ R P 349	S D 24 G 81~83-72・73 F 3a掘り 下げ F 3a下砂層あり, R P 375~395 自然遺物多量出土
9月25日(金) 雨	10月8日(木) 雲りのち雨
G 89~92-71~75写真撮影, 注水	S D 24 G 81~83-72・73 F 3b~F 4掘り下げ, R P 396~402出土
9月28日(月) 小雨のち雲り	10月9日(金) 雲り時々雨
G 84・85-76~79, G 84~87-74 ・75, G 78~83-74・75排水, 遺物洗浄	10月12日(月) 小雨のち晴
9月29日(火) 晴	排水, S D 24東 G 79-71~73表土剥離
排水, S D 24セクションベルト排除, 平面 図実測 R P 361~364 RW 117~119 出土	10月13日(水) 晴のち雲り
9月30(水) 雲り一時小雨	排水, S D 24 F 5a, b・6層掘り下げ, R P 404~416, RW 120~125第2号 絵馬出土
	10月14日(木) 雨のち雲り
	遺物洗浄
	10月15日(木) 晴
	G 79-71面整理, S D 24 F 5・6層 掘り下げ R P 418~422, RW 126~131 斎串出土

10月16日(金) 晴のち雲り	11月1日(日) 雲り
S D 24 F 6・7層掘り下げ R P 423～428	面整理, 昭和54・55年度検出 S B 1・S D1, S D 5等にポールを立てる。(現地説明会準備)
10月17日(土) 雲り	11月2日(月) 雲りのち雨
遺物洗浄・整理	現地説明会, 及び調査検討会
10月20日(月) 雲り	11月5日(木) 雲り
排水, 面整理, 文化庁, 県文化課発掘調査地視察	S D 24・26 排水, S D 26 F 6層掘り下げ写真撮影 R P 486～494
10月21日(水) 晴	11月6日(金) 雲り
— C・D地区調査開始 —	S D 26, 排水実測
C地区G 70-16～35杭打ち, ボーリング探査	11月7日(土) 晴のち雨
10月22日(木) 雲りのち小雨	S D 26, 平面図実測, 柏倉特別調査委員視察
C地区G 70-16～35, D地区15～40-115杭打ち	11月9日(月) 雪のち雲り
10月23日(金) 雨	遺物洗浄, 整理, 打ち合せ
川西町議会委員調査地視察, 遺物整理	11月10日(火) 晴のち雲り
10月26日(月) 雲り	D地区平面図実測, 撮影
C, D地区排水, 表土剥離	11月11日(水) 雨
10月27日(火) 晴	遺物整理
C地区排水, 面整理 S D 26 遺構確認, ローリングタワー移転	11月12日(木) 晴
10月28日(水) 雲り	D地区埋め戻し, 面整理
C地区S D 26 F 1～3層掘り下げ, 写真撮影, R P 450～473 自然遺物等出土	11月13日(金) 雨
10月29日(木) 雲りのち雨	遺物整理, 文化庁浪貝調査官, 県文化課佐々木係長視察
東北歴史資料館, 赤外線テレビカメラにて 今年度出土遺物の解読依頼, R W 49, 125 が絵馬であることが判明	11月14日(土) 晴
10月30日(金) 雲りのち雨	写真撮影, 平面図実測, R P 505～519
排水, 現地説明会準備, 資料作成	11月16日(月) 雨
10月31日(土) 雲り	遺物洗浄整理
排水, 面整理, G 80-71～73表土剥離	11月17日(火) 小雨のち雲り
	S B 12 E B等埋め戻し, 機材整理
	11月18日(水) 小雨
	機材整理, 撤収



第2図 道伝遺跡グリット配図

III 発見された遺構

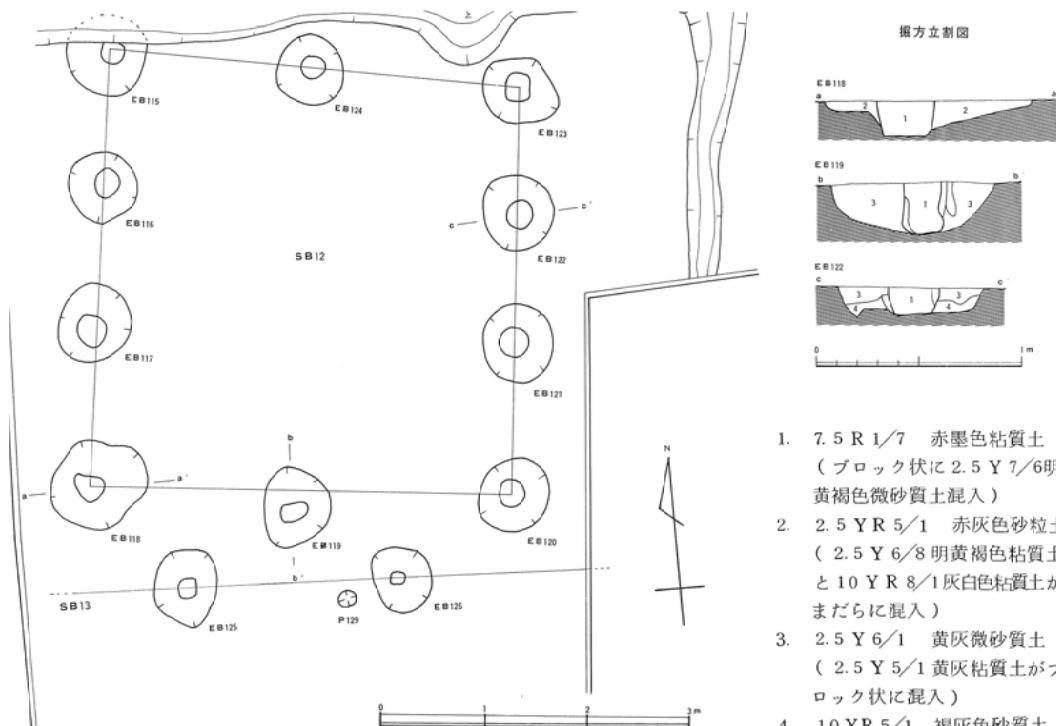
1 建物跡

S B 12 (第3図, 第2図版)

G 82～92 - 72～75より検出された、東西2間(南梁行東より2.1m+2.1m)×南北3間(西桁行南より1.5m+1.45m+1.3m)のほぼ正方形の掘立柱建物跡で、第III層下より確認されたものである。掘り方は円形を示し、直径70～80cmである。柱痕は直径25～30cmの円形を示し、南北柱痕軸はN-6°-E方向を示している。検出された地区は、昭和54年度の圃場整備の際遺構面は削られ、第I攪乱層の直下に確認されるのが大部分であるが、一部に第III層が残り、第III層黒褐色粘質土を剥離することで、確認される。掘り方を3基(E B 118・119・122)を掘り下げたが、遺物は出土していない。

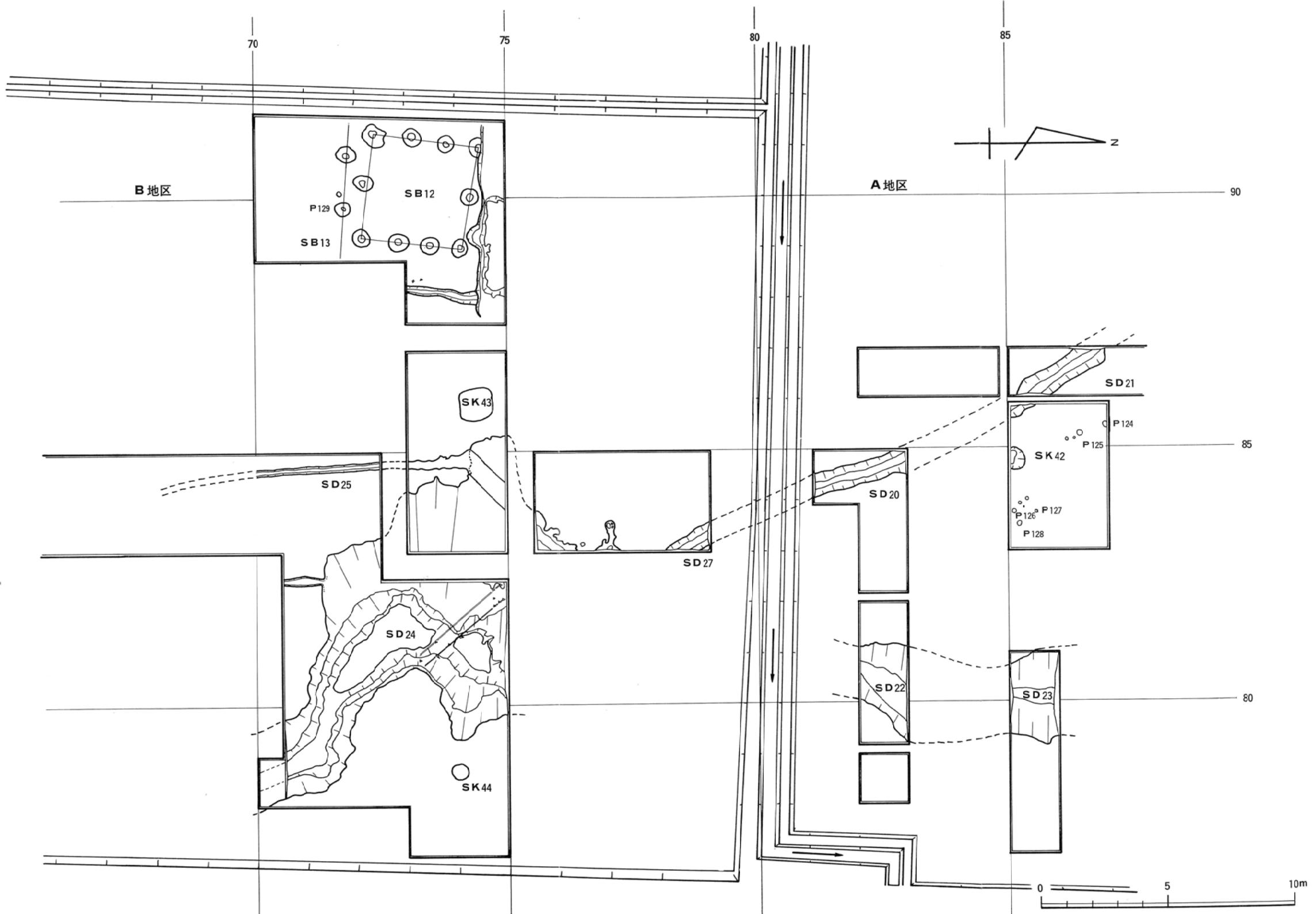
S B 13 (第3図)

S B 12の南G 90・91 - 72にて2基の掘り方と柱痕が検出されたもので、柱痕は一辺15～20cmの隅丸方形状を示し、掘方は60～70cmの楕円形でE B 125とE B 126の間尺は2.05mで、東西に延長するものと考えられる。しかし、調査期間や西側は調査地外となることより、遺構面を拡張することができなかった。



第3図 S B 12・13 掘立建物跡平面図

1. 7.5 R 1/7 赤墨色粘質土
(ブロック状に2.5 Y 7/6明黄褐色微砂質土混入)
2. 2.5 Y R 5/1 赤灰色砂粒土
(2.5 Y 6/8明黄褐色粘質土と10 Y R 8/1灰白色粘質土がまだらに混入)
3. 2.5 Y 6/1 黄灰微砂質土
(2.5 Y 5/1 黄灰粘質土がブロック状に混入)
4. 10 YR 5/1 褐灰色砂質土



第4図 遺構配図

2 溝 跡

S D 20・21・27 (第4図)

G 84～87・79～87より検出された溝跡で、溝の方向、埋土等より S D 20・21・27は同一溝と考える。溝幅80～90cm、深さ26cmで北から南に流れる溝で主軸はN-25°Wである。埋土は単1層で多量の炭素粒を含む層で、溝は浅いV字状を示す。S D 24と交差するものと考えられるが調査していない。出土遺物として須恵器坏、甕、土師器坏甕片が20点出土している。

S D 22・23 (第4図、第3図版)

G 80～82・83・G 80・81～86の第III層下にて検出された溝跡で埋土は5層に分けられ、埋土は自然堆積を示す。溝幅は2～3.5m、深さ40～65cmの浅いV字状を示す。遺物は、須恵器、土師器片が12点出土したにすぎないが、木製品としては、曲げ物、弓絵馬、木簡様木製品、棒状木製品、板状木製品、柱材、自然遺物等が出土し、特に棒状木製品は225点出土している。

S D 24 (第4・6図、第2図版)

G 79～85・71～75にて検出された池状の不定形な溝状で、幅最大11m、最小2m最大深さ120cmを測る。この溝を横断する2列の杭が検出され、2列の杭列の間は、60～65cmで、杭と杭の間隔は一定しない。杭は約60cm打ちこまれているもので、しがらみや、土囊を組んだ跡と考える。溝底部の高低差より、水流は南より北へ、S D 22、23に流れたものと思料される。出土遺物は、須恵器坏が主体をなし、墨書として、「南」「依」「龍麻□」「大」「隻」「林」「目」「石」「万々」「目」「別」等、不明墨書を含めると20点出土した。木製品として、木簡、絵馬、斎串、曲げ物、棒状木製品等が検出されている。

S D 25 (第6図)

G 85～70～75で検出したもので、S D 24第1層を切っているものである。覆土は2層に分けられ、幅28～60cm、深さ約20～25cmを測る。出土遺物は、土師器、須恵器が破片状に出土し、須恵器蓋には「依」の墨書がある。

S D 26 (第6図、第1図版)

G 70～30～24第II層下にて確認され、溝幅推定5m、深さ1mで覆土は8層、自然堆積層である。遺物は第5層より自然遺物が出土し、第6層下より第8層にかけて、赤焼き土器、須恵器、土師器が検出される。墨書として「目」「□万」がある。昭和54年度検出されたS D 1と出土遺物、覆土より同一溝と推定される。

3 土 壤

S K 42

G 75 - 86, 第III層下にて遺構確認できたもので, 直径 60 ~ 85 cm, 深さ 28 cm, 覆土は第1層赤黒色粘質土, 第2層黒色シルト, 第3層灰黄褐色シルトの3層に分けられる。遺物は出土されない。

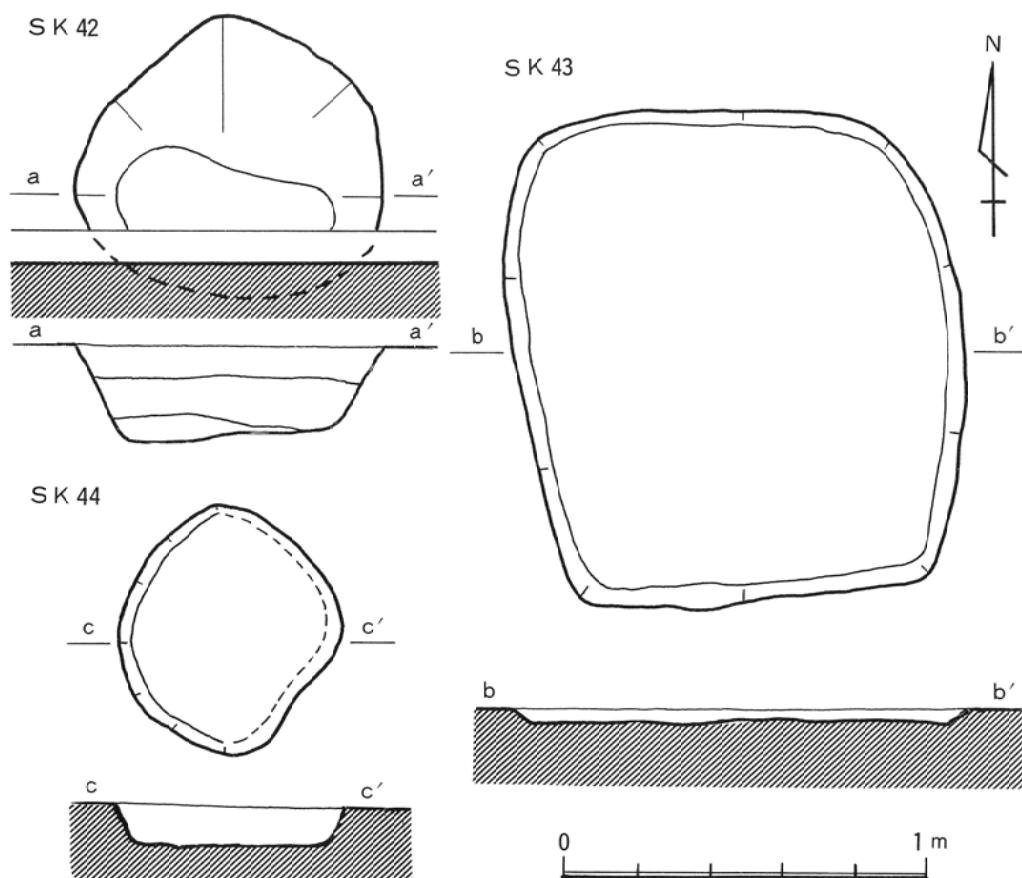
S K 43

G 86・87 - 75, 第III層上にて確認一辺約 1.30 m の隅丸方形の形を示し, 深さ 3 cm, 暗褐色粘質土の一層からなる土壤で, 出土遺物は, 土師器甕片 1 点検出された。

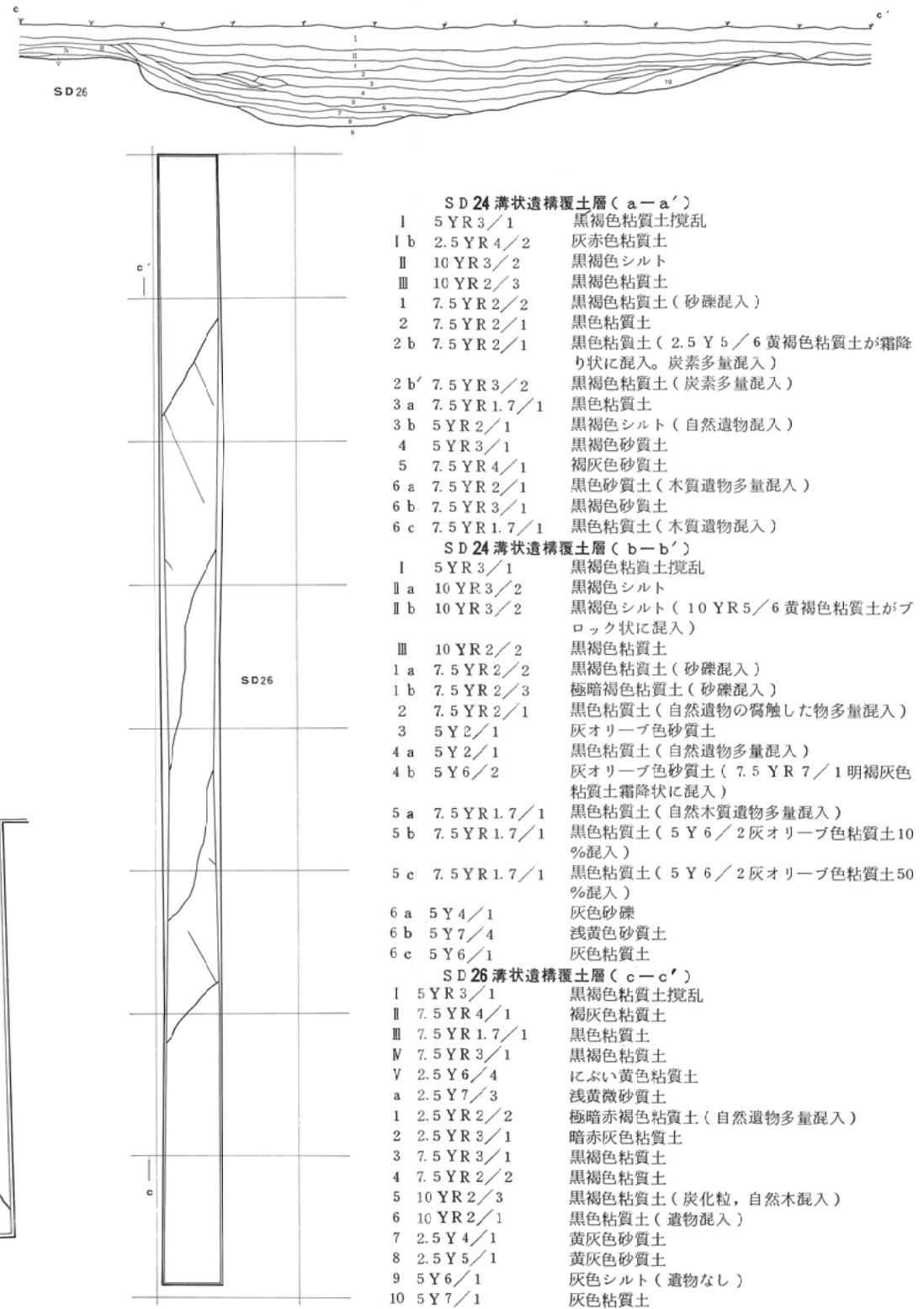
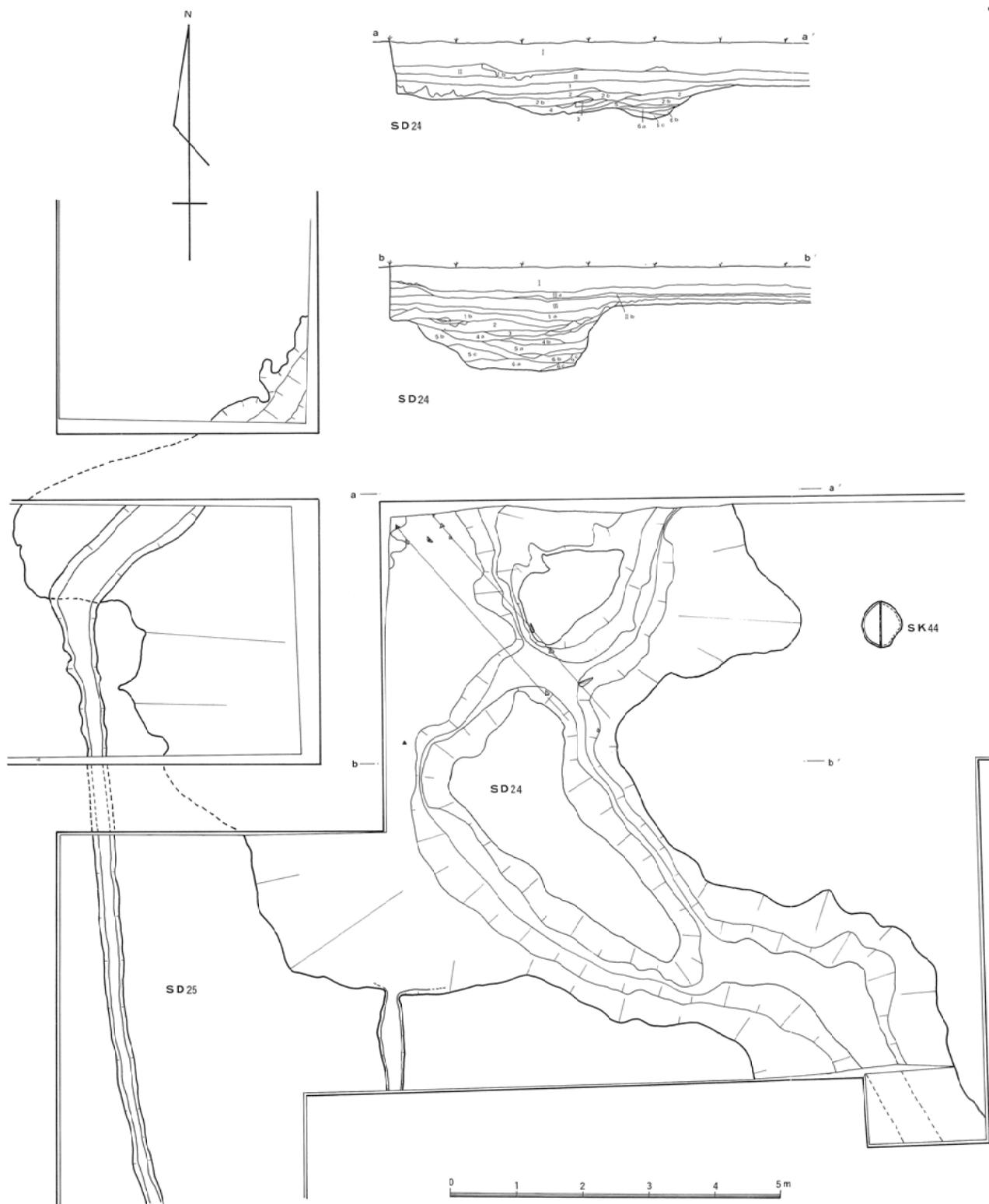
S K 44

G 79 - 74・75, 第III層下にて確認され, 直径 65 cm の円形の土壤で深さ 12 cm, 暗褐色粘質土单一層の覆土で遺物は検出されない。

ピットは 6 基検出され, その中で遺物の出土したのは P 129 で, 土師器甕片が検出されている。



第5図 土 壤 平 面 図



第6図 溝跡平面図及セクション図

IV 出土遺物

1 土師器 (第7図、第6図版)

今回の調査で土師器片が933点出土した。土師器片を細分すると、坏片118点、甕片809点、皿片6点出土している。甕及び坏は、ロクロ調整のものと、ロクロを用いないものがあるが、坏でロクロを用いないのはR P 442・444の2点のみである。

SD 20・21・27より坏片2点、甕片16点出土し、坏は内黒土師器付高台坏1点、土師器の付高台坏1点、どちらも底部切り離しが、糸切り痕をのこす。

SD 22・23より甕片3点出土しているが小片である。

SD 24より坏片3点、甕片655点出土し、坏は3点とも内黒土師器で、内1点に高台をもつものがある。この溝は甕片と考えられるものが大部分であり、この溝は須恵器坏と土師器甕が主体をなす。甕片を細分すると、甕口縁部70点、腹部533点、底部52点となる。皿片は6点確認できる。

SD 26より出土した坏片は25点、その中で底部確認されるものは6点、糸切りである。

2 須恵器 (第7図、第6図版)

出土総数は618点であり、今年度の調査では墨書土器はすべて須恵器であった。総数の内坏が395点、甕が182点、蓋が41点である。

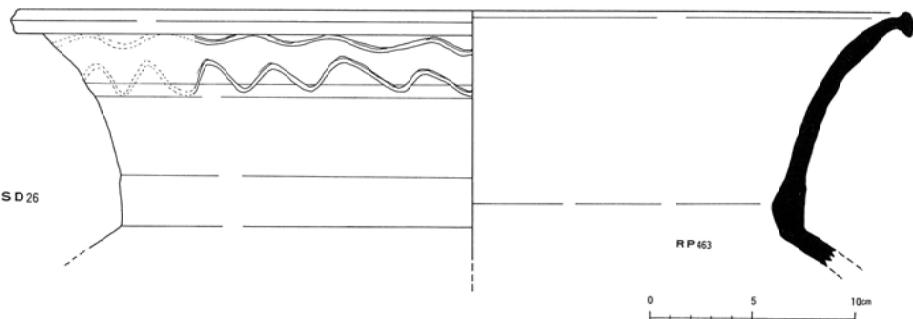
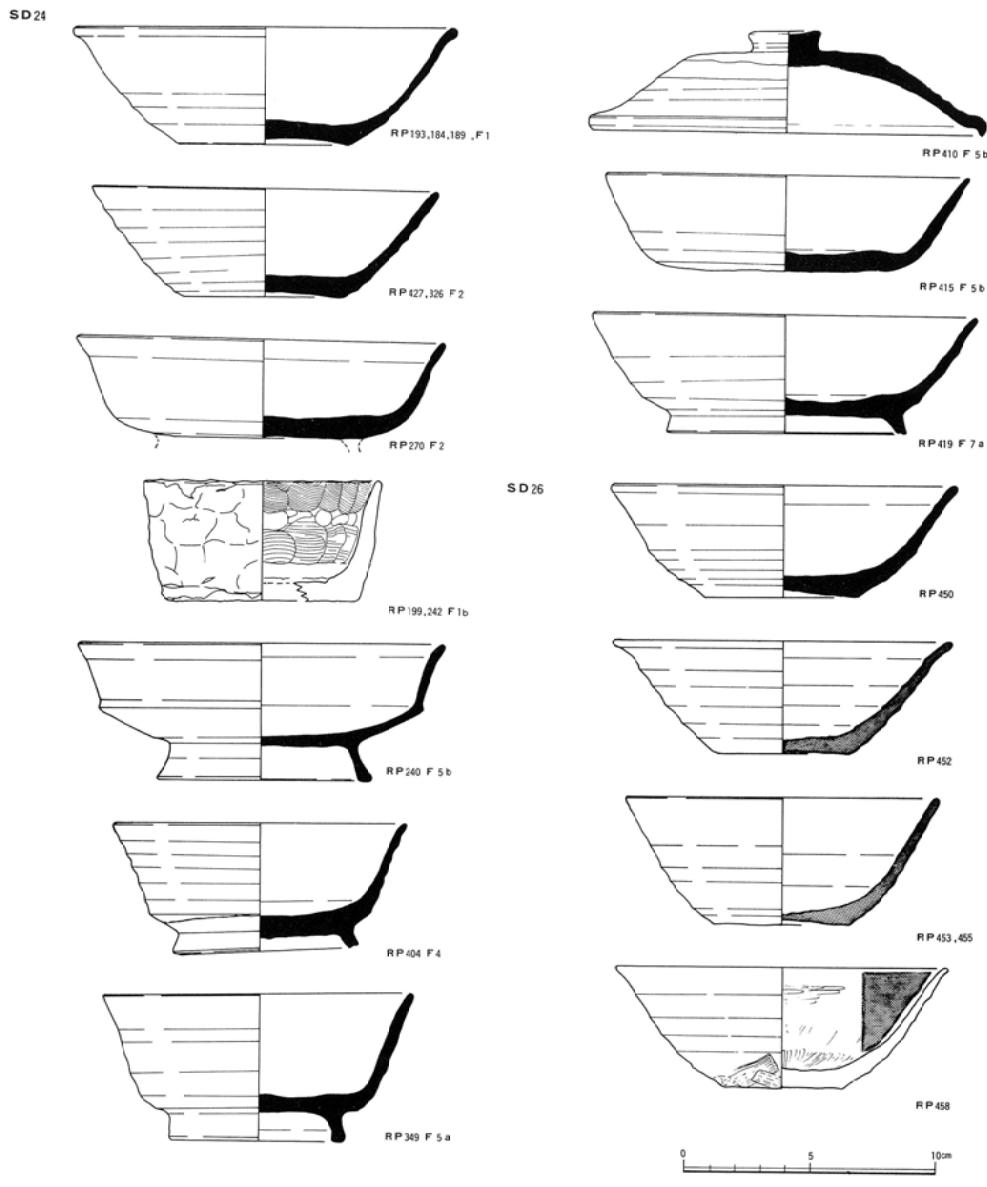
SD 20・21・27より坏4点出土しているが小片である。

SD 22・23より坏片6点、甕片3点出土し、坏の底部切り離しは、ヘラ切り1点、糸切り3点である。

SD 24より須恵器蓋片34点あり、その中で墨書「弔」、「別」の2点がある。坏片は297点出土し、その中で底部切り離しが回転ヘラ切り75点、高台をともなうもの11点、陵があるもの3点である。底部切り離しが回転糸切りは12点出土し、高台がともなうものは2点である。溝覆土4～6層からは、糸切りは検出されず、1～3層はヘラ切りが主体で糸切りが数点出土した。これら坏片の中で墨痕がみとめられるものは18点あり、墨書として、「目」「林」「石」「依」「隻」「大」「南」「龍麻□」「万」等が認められる。甕壺片は92点出土している。

SD 25より総数9点破片で出土し、中で蓋一点が接合でき墨書「依」が1点認められる。

SD 26より坏片が18点出土し、ヘラ切り2点、糸切り6点、墨書「□万」「目」の2点が検出された。蓋片は2点あるが小片である。甕片は10点出土している。また、赤焼き土器が10点出土しているが、赤焼き土器の甕と土師器の甕との分類整理が未整理のため



第7図 SD 24・26溝跡出土土器

ここでは、土師器甕と合せているが、後に、分類、整理致し、墨書き土器と共に報告する。

3 木 製 品 (第8図、第4・5図版)

木製品は S D 22・23・24・26 より出土している。ここでは、S D 22・24 より出土したおもなものにつき、一定の目的で加工、使用したと考えられる木質遺物を木製品として説明を加えることとする。

木簡及び木簡様木製品

第6号木簡 (RW 132)



長さ (5 cm) × 幅 (2.9 cm) × 厚さ 0.4 cm 039 型式 (推定)

S D 24 第4層出土、板目材で墨痕はほとんど失なわれている。左上端に切り込みがあり右端、下端は折損し腐蝕もはなはだしく原形はとどめない。

木簡様木製品 (RW 20) 長さ 20 cm × 幅 2 cm × 厚さ 0.3 cm

長さ 20 cm × 幅 2 cm × 厚さ 2 cm

S D 24 第4層出土、上端左右に切り込みをいれ、下端を尖らせたものであるが、墨痕はみとめられない

絵 馬 (第8図、第5図版)

第1号絵馬 (RW 49)

上辺 12.5 cm、下辺 13.0 cm、左辺 8.1 cm、右辺 8.1 cm、厚さ 0.9 cm 板目材

S D 22、第4・5層出土、墨書きの方形絵馬で材は腐蝕し、わずかに墨痕がみられる。頭部と両脚が確認される。裏面は削りがあるが墨痕は確認できない。

第2号絵馬 (RW 125)

上辺 8.7 cm、下辺 8.7 cm、左辺 7.5 cm、右辺 7.5 cm、厚さ 0.7 cm 柱目材

S D 24 第5層上出土、墨書きで、材左辺は2回にわたり面より直角に切断され、右辺は面より鋭角に切断痕を示す。裏面は粗面で墨痕は認められない。絵は左向きの飾り馬が描かれ、前脚を曲げ首は水平に下げられている。口元より手綱がはられ、尾が後になびき、鞍も書かれているようである。

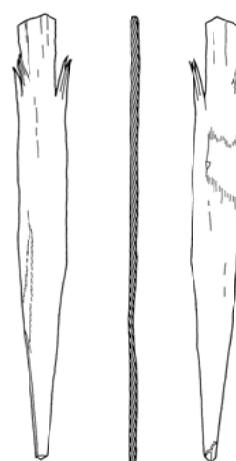
両絵馬とも、紐穴はなく懸け吊るされたものではないものと考えられる。

斎 串 (第8図)

S D 24 第4層下より2点出土している。第1号斎串 (RW 93) は長さ 18.5 cm、幅 1.8 cm、厚さ 0.4 cm。第2号斎串 (RW 126) は長さ 17.6 cm、幅 1.9 cm、厚さ 0.3 cm を測り、2点とも上端は山形に作り、上端左右に、上から下に斜状 4～5 本の切り目があり、下端は尖らせたものである。



RW135,木簡 (SD 24出土)



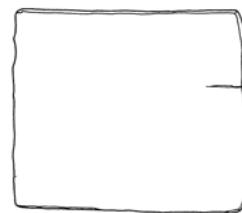
RW126,木串 (SD 24出土)



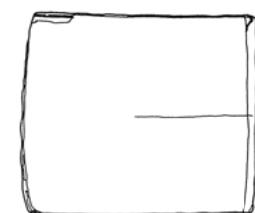
RW93,木串 (SD 24出土)



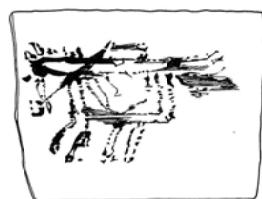
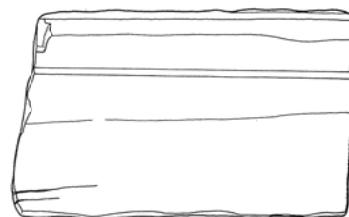
RW20,木簡様木製品 (SD 22出土)



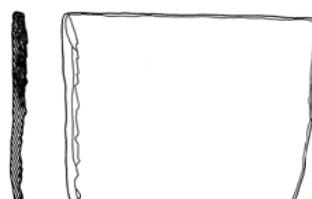
RW9,絵馬状木製品 (SD 22出土)



RW49,第1号絵馬 (SD 22出土)



RW125,第2号絵馬 (SD 24出土)



第8図 SD 22・24出土木製品

V ま と め

今回の調査で、昭和 54 年度に検出された S D 1 (木簡出土) は、緊急発掘で想定された (東西) 200 m × (南北) 300 m の方形に廻る溝ではないことが、昭和 55・56 年度の調査で確定されたことである。今まで遺跡を区画する大きな手がかりとしていただけに、遺構の区画、線引きが振り出しに戻ったと云えるが、この大溝がどのように進むものか、出土品も多く、遺跡の性格を把握するうえで、重要な遺構であると考えられる。

検出された掘立建物跡は、S B 12・13 の 2 棟である。この建物跡の年代は、切り合いか見られないが、両建物の掘り方が、接近していることと、柱痕が円形と方形の違いにより二時期に分けられる。しかし、掘り方を 3 基断ち割ったにすぎず、埋土から遺物は検出されない。建物の柱筋の傾きは、前年度まで検出された建物跡の柱筋と異なる点が上げられるため、建物の建立時期は断定しがたいものであるが、第Ⅲ層下にて検出されたこと、建物跡周辺の出土遺物、S B 12 掘り方と同色ピットからの土師器甕片等を鑑み、S B 12 は早い時期 8 世紀末～9 世紀前半の建物と考える。この建物跡と S B 1 (昭和 54 年検出、3 間 × 7 間・2 面廂) の中間に今年度新たに検出された S D 24 不定型溝状遺構より、8 世紀末～9 世紀前半 (S D 1 第 V 層平行) の壺類と斎串、墨書土器、絵馬が検出された。これら木製品は、S D 24 覆土下層 (4～6 層) からの出土で、8 世紀末頃と云える。また、第 2 号絵馬、斎串、完形の須恵器壺と蓋が出土し、一括した形のようにも考えられ、ある種の信仰的な所産であると考える。8 世紀末の絵馬の出土例として、私の知るかぎりでは静岡県伊場遺跡、奈良県稗田遺跡がある。^{註 3} 伊場遺跡の性格は、郡衙跡説、駿家跡説等諸説の見解があり、当遺跡も出土遺物より官衙遺構がより強くなったと云える。今回の墨書文字は 7 文字は 7 文字新らたに検出されたが、実測図等は整理後に報告する。S D 24 の南約 100 m で検出した S D 26 は覆土から S D 1・5 と同一溝と考えられ、溝底部の標高差より、S D 26 が S D 1・5 より高いこと、また、地形より S D 26 より S D 1・5 に水が流れたものと考える。覆土は 8 層に分けられ、S D 26 第 5～6 が S D 5 の第 2 層と平行し、S D 26 第 7 層は S D 5 第 3 層、S D 26 第 8 層が S D 5 の第 4 層にあたるものと考えられる。

以上、今回の概要を述べたが、遺構の完掘、拡張していない所もあり、不明な点も残っている。今後調査地周辺の調査を拡域に進めていく必要性がある。その中で不明な点を解決したい。

参考文献 註 1 藏田順治「川西町史上巻」1979

註 2 佐藤庄一「庄内考古 16 号」1979

註 3 奈良県立民俗博物館「日本人の祈り小絵馬」1981

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館「大和を掘る」1981

註 4 浜松市遺跡調査会「伊場遺跡第 8～13 次発掘調査概報」1981



A・B地区南より
発掘前風景



B地区 発掘風景



C地区 発掘風景

第2図版



調査地全景



S B 12
掘立建物跡



S D 24 全景



第4図版

斎串出土状況

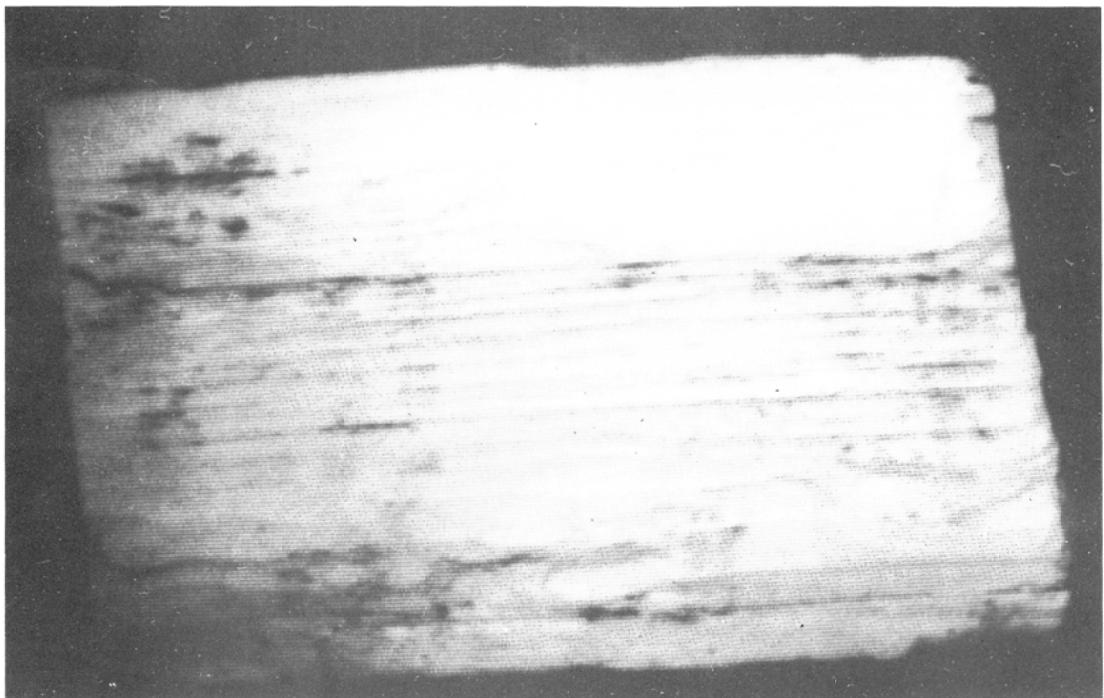


須恵器蓋出土状況



須恵器坏出土状況





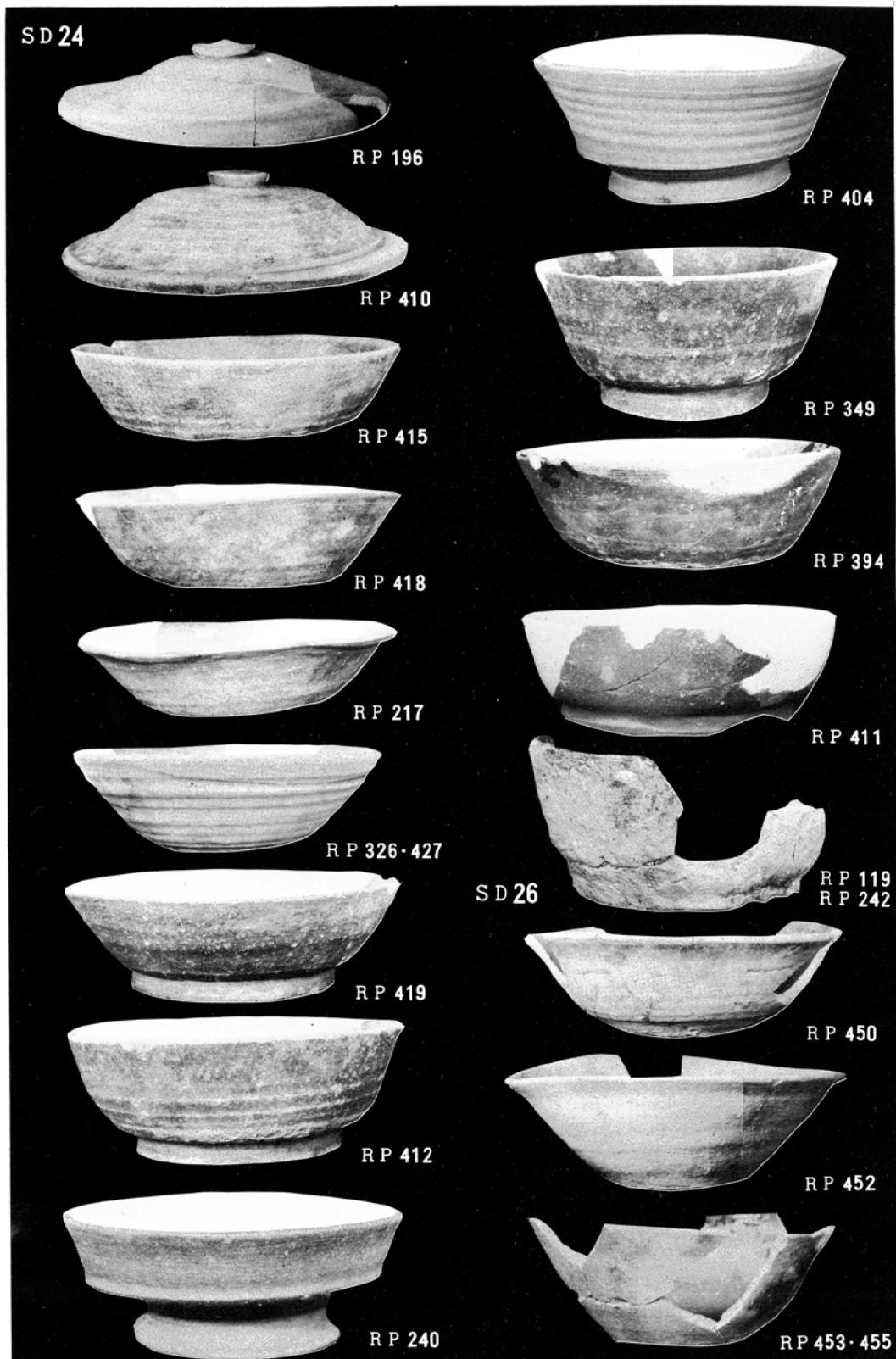
第 1 号 絵 馬



第 2 号 絵 馬

* 東北歴史資料館 赤外線カメラにて写されたブラウン管を撮影したものである。

第 6 図 版



S D 24 • 26 溝跡出土土器



緑と愛と丘のある町

道伝遺跡発掘調査概報

昭和 57 年 3 月 10 日 印刷

昭和 57 年 3 月 15 日 発行

発行 川西町教育委員会社会教育課

印刷 よ ね ざ わ 印 刷
